
知られざる世界の旅人

たつたまごっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知られざる世界の旅人

【Nコード】

N8398X

【作者名】

たつたまごっち

【あらすじ】

え？テンプレ？転生ですか・・・やっぱり一つの世界じゃ満足できねえ！少しマイナーなチート？（道具）を貰いさまざまな世界を旅する物語です。

旅の始まり（前書き）

自称ドクター（偽）が世界をめぐる旅です。処女作、最強要素、原作破壊、ご都合主義がダメな方はお引き返しねがいます。更新は不定期です。

旅の始まり

さあ、みなさん死ぬとはどんな感じなんだろうか？

僕はついさっき体験したからわかるけれど生きているみなさんはどう考えているんだろうかな？

まあ、世間では走馬灯が見えるとか三途の川を渡るとか言われているけれど、

そんなことはない！断じてだ！

俺は死んだ……

まあ、テンプレのように子供を助けたとかじゃないけど

なんか某隙間妖怪さんのようなスキマに吸い込まれたわけだが

死んだ感覚というか自分が消えていく感覚があつたから死んだと思うんだけど

「じゃあ俺は今どこにいるんだ？」

今俺がいるのは真っ白くて何も無い空間、奥行きも高さもないただ白いだけの空間だ！

「ここはボイドとか虚数空間とか外の世界では呼ばれていますね」

また髪の毛が鮮やかな青色なよう！、よだった。

「え？」

俺はフリーズした……

「おゝいゝすゝいゝまゝせん」

「……………」

「返事してくれませんか？」

10分後…………

「おゝい（泣）」

「うわ！？どうしたの？」

「いったいなんだっていうんだ？」

「私の話を聞いてくれますか？」

涙目で訴えてくるので…………

「だが断る」

「何ですか（泣）」

そろそろ本気で泣いてしまいそうだから話を聞いてやろう。

「はゝおふざけはここまでにして話って？」

「はい！単刀直入に言います。あなたは消えました。」

「え？死んだとかじゃないの？」

こついうのって間違えて死にましたとかじゃ？

「死んだといつても過言ではありませんが本質的には時空間の裂け目に落ちました。」

「時空間の裂け目？」

そんなドクター・誰的なものがあるのか？

「そうですね。世界の歪みみたいなですよ。

前にこの世界で起きたのは大体6550万年ぐらい前だったはずですね。」

6550万年前って恐竜の絶滅したときじゃねえか、そんなのが起きて地上は大丈夫なのか？

「今回の規模も小さかったので被害は最小限！つまりはあなた一人だけですな。」

俺一人だけか・・・って俺の心読まれてね？

「ええまあ、一応世界の管理者やってますから（キリッ）」

「ようゝ、よで言われてもね」

「わたしだって好きでこんな体してません！！といえますかそんなことうでもいいんですよ！これからのことを決めましょう」

これから？俺は消えたんならこのまま存在も意思もすべてが消えるんじゃない？

「そんなことすればすべての世界が消滅しますよ？」

え？何それ怖い……

「すべての世界での命の総数は決まっています。一つでも減れば莫大なエネルギーが生まれすべての世界が消滅するということですよ。」
「そーなのか！

「ここからはよくあるテンプレと同じく少しですが願いを叶えましょう。そうですね、数は4つですかね？一つにつきオプションもつけましょう。こんなところですかね？」

「基本的に何を頼んでもいいの？」

何でもは無理でしょ？だってよくチートオリ主が使うような世界を破壊する力とか創造とかやばくね？

「そうですね？神にしてくれとか命の創造とかは無理ですね。」
「じゃあ基本的のなんでもいけるのか……」

「じゃあ一つ目にめだかボックスの日之影空洞の「知られざる英雄」
《ミスターアンウン》とそれに見合うだけの戦闘能力を」
ぶっちゃけめだかの完成とかよりかっこよくない？

「見合うだけの戦闘能力はその異常の付属アブノーマルなので願いの消費は1つですね。」

「じゃあ次は子供の時から夢を叶えよう。」

「ドクター・フリーに出てくる次元超越時空移動装置を世界を渡る能力を付けてそして俺でも弄れる様に簡略化しておいてくれね？」
子供のころからこれに乗りたかったんだよね！

「えーと、簡略化はいいんですが世界を渡る能力は例えば物語の世界に行っただとしてもそれはパラレルワールドにしかありません。本当の物語の世界は封印されており誰も外から干渉できません。まあ、パラレルワールドと言っても99.9999%同じですけどそしてむやみやたらと歴史をかいへんしないでくださいね。下手をして世界が壊れては困りますから」
すっげー！ほとんど叶っちゃった。後二つはと……

「3つめは十二の試練トライエン・ハンをお願いしたい。」
fateで一番好きなサーヴァントの宝具だしね。

「え？ターデイスとくれば種族をタイムロードにしてくれとかじゃないんですか？」
あんたタイムロード知ってたんだね。

「そりゃーねー本物と友達ですしね。」
え？

「まあ、そんなことはどうでもいいんです。じゃあなんで十二の試練トライエン・ハンなんですか？」

「タイムロードだと再生するたびに顔や体が変わるだろ？それが世界を移動している間になればまた前の世界に戻った時に不便だからね似たようなのを思い出したらこんなのがあったからね。これを選んだんだ。」

「では、十二の試練を付けておきます。これもタイムロードっぽく再生から15時間以内は細胞活性化時間として腕ぐらいなら再生するようにはしておきますね。」

やっぱりこの管理者はオブション抜群だな！！

「最後は知識をお願いします。具体的にはすべての世界の知識をターデイスに詰めておいてくれないか？そしてその該当する世界に行ったときにその世界の知識が頭に流れ込むようにしておいてくれないか？」

これで世界で迷うこともないだろう。

ゴマダレ

ゼルダのような効果音が鳴る響く……このなにもない空間にこの音が響くのは非常にシニールだな。

「はい！ターデイスに付加完了しましたよ。えーとターデイスの形はどうしますか？カメレオン回路は壊れていませんから行った先で形を変えますか？それとも今ここで固定しておきますか？」

うーんどうしようかな？でもやっぱり！

「あのポリスボックスをお願いします。」

ターデイス（改）とはいえやっぱりターデイスはあの形じゃないかね（キリッ）

何もない空間が光り始める。そしてあのターデイス独特のエンジン音が鳴り響き……何もない空間にあのポリスボックスが現れた。

「これで要求はすべて満たされましたがあとなにかありますか？」

幼女が「幼女言うな！！！」

管理者がそう言う

「一つだけ聞かせてくれるか？」

俺は最後に一つだけ聞きたいことがあった。

「なんででしょうか？」

「君はずっとここで一人つきりなのか？」

「ええ、そうですが？」

管理者が淡々と言う。

「何も思わないのか？」

「初めのころは寂しかったですけど今はもう慣れました。」

慣れたと言いつつも寂しげに俺の微笑む

「じゃあ最後のオプションの追加だ。ここにもターデイスで来られるようにしてくれるか？」

「！？ なぜそんなことを？」

本当になぜかわからなさそうに俺に聞く

「君が寂しそうだったからな・・・」

せつかく可愛いんだ大人になるまで待っていれば美人になりそうだからな

「君には笑っていてほしいんだ。」

くせえ・・・臭すぎる・・・誰かフアブリュズを

「え・・・は、はい／＼」

顔を赤らめながら言う。

あんなセーフこんな冴えない俺になんかに言われたんだ。羞恥心抜群だろう。

「あ・・・これでターデイスは要求道理ですよ？では、最後に容姿などの設定に行きましょうか」

容姿か？何がいいかな・・・

「容姿は上の下ぐらいので頼むもちろん性別は男で年は24歳ぐらいからにしておいてくれ。」

「了解しました」

せつせと幼女が作業している間俺はどの世界に行くかを考えていた・・・

「作業完了しましたよ！ではいつてらっしゃいませ楽しい世界の旅を！いつでも戻ってきてくださいね」

笑顔で見送ってくれる。

「あ、最後に私の名前はアテネです。おぼえておいてくださいね。」

そんな有名な人だったんだ・・・ま、関係ないけどね・・・

「また来るからまたね」

といいターデイスの中に入る・・・

中は第9代目ドクターの時のターデイスとほとんど同じ少し違うのはモニターだけですべて操作できることだけだ。

ドクターのように操ることはできないしな、あのボタンの中には自爆スイッチもあるみたいだしね

そしてターデイスは何もない空間から独特のエンジン音を鳴らしこの空間から消えていく……………

アテネ side

「あんな奴君以外は初めてよドクター？」

アテネが尋ねる人物こそかの有名なドクター本人である。

彼の世界に管理者はいないそのため代わりに管理者代行として時空を回っているのだ。

「ああ、そうかもな。実にファンタスティックだ！」

ドクターがふざけたように言う。

「まあ、ファンタスティックかはおいておいても彼は世界のためになるわ」

「後は彼次第かな」

「ええ、もう行くの？」

「ああ、もう行かないと……………ではまた」

「また会いましょう」

こちらもさつきと同じようで違うエンジン音を鳴らしながらターデ
イスは消えていく……………

「後は精々楽しませてもらいましょー!」

そう言いアテネはこの空間から消える。

誰もいなくなった空間

そして物語はこの空間から始まる……………

旅の始まり（後書き）

こんなもんですが今後も見ていただけると嬉しいです。
ただターデイスを使って世界を回るのが見たかっただけです（笑）

ターデイスの中そして初めての世界

俺はアテネと別れた後このアテネにもらった魔改造ターデイスの中を探索することにした。

そして今……………

「すっげー!!!!!!!!!!!!!!」

こんな叫び声をあげることになったのは思い出すこと2時間前のことである。

二時間前……………

「まずは、この手紙を読むことにしようかな？」
ターデイスに入ってすぐのところ到手紙があり裏に「アテネより？」とか書いてあったので破りたくなつたがその衝動を抑えつつ手紙を読むことにした……………

—《こんにちは？アテネです。あなたは今どこで何をしていますか？と「you」ネタをしてから話を進めますね。ではまずこのターデイスですがドクターフー本編で言っていたように普通の乗り物ではなく生きていますので機嫌を損ねないようにね。それに艦魂のようなものから見つけたら話しかけてあげてね、そしてこのターデイスは地下10階までありますよ？疑問形なのは自分でもわからないからね…………多分地図はメインモニターに映し出されるはずだからそれで調べてね！そして最後に2つ、一つ目はこのターデイスは本当のドクターフーの世界には行くことができません。理由

はドクターが世界を隔離しているからです。そして2つ目は自分の名前を決めてね。

君は文字道理世界から消えたから名前、痕跡、記憶、すべてが消えているので君の名前は使えません。

では、

楽しい世界の旅をー アテネより》

そーか、だから俺の名前である「××××××」は発音も書くこともできないんだな。……

やっぱりずっと使ってた名前だからな惜しみたくなるけど……そうだなー新しい名前は……「ドクター」

やっぱりこれだろう。よし、名前も決まったことだしターデイスの探索をしようかな。

メインモニターをいじり地図を表示させる。

ターデイス内部

一階

メインルーム

二階

居住スペース

三階

食糧貯蔵スペース

四階

武器貯蔵スペース

五階

ダンスルーム

六階

図書館

七階

ゲストルーム

八階

病棟

九階

訓練スペース

十階

?????????

広すぎねー（呆）

無駄に頑張りすぎだよアテネエ・・・

1階だけで広さ的には豪邸レベルなんだぞ・・・

まずは、武器を見に行こう！

四階 武器貯蔵スペース

「すっげー！！！！！！！！！！」

つい年を忘れて叫んでしまった。

しかしその筈全世界の武器・道具が所狭しと並べられているのだからな

「これは、一〇式戦車じゃないか！！！！」

10式戦車だけではない世界中の戦車がある。

「ワルサーP-38！！！！！！！！！！」

「素粒子ガンまで・・・・・・・・・・」

「こ、これは、ディエンドライ（ry」

自重しろwww

「武器だけでもうお腹いっぱいだな」

そうして見つけた……これを「ソニックスクリュードライバー」だ！

ドクターフリー縁の物はいろいろあるみたいだな。サイキックペーパーにエクストラポレーターまであるみたいだ。でも、つなぎ方が分からん。あの空間に戻るか……

ギューーン！ギューーン！

白い空間に現れるターデイス

「あれ？ずいぶん早いわね？いや、あつちはまだ結構な時間経っているのかしら。」

「アテネ！エクストラポレーターの調整をしてくれない？」

「何で？別に使わなくても旅自体はできるんじゃないの？」

「いや、エクストラポレーター自体はそれほど重要じゃないんだ。それで発生させられるフォースフィールドが必要になるかと思って。」

あれはダーレクのミサイルでも効かず宇宙規模の大爆発でも効かないという優れたものだからな

「来るのはわかってたけど、こんなに早いとはね。ここで調整すれば10分で済むわ、ここでお茶でも飲んでいきなさい。」

といい何もないところをつかんだと思うとちやぶ台とお茶を出す。湯気まで出てるぞ。

「この舟借りるわね」

と言いつターデイスに入っていくアテネ・・・やっぱり小さいな・・・

・

「あゝおいし」

10分経過

「調整終わったわよ。メインモニターから動かせるから、じゃあ、
いつてらっしゃい」

豪く簡単にしたもんだな。やっぱり管理者は伊達じゃないというこ
とが。

「ありがと、いつてきます。」

ギューーン！ギューーン！

何処かの世界の宇宙に出る。

メインモニターをチェックするとフォースフィールドの項目がある。
簡単な設定は此処でできるようだな。

そろそろ初めの目的地を見つけようかな・・・
いつまでも宇宙空間に漂っている訳には行かないしね・・・

「では、初めは「東方p『ガタツン』」！？なんで勝手に止まった

「……………」

まあ、旅は長いんだ東方の世界はまた今度にしよう！

「ターデイスよ、この世界の知識を頼む。……………」
大体分かった」

「この世界は『涼宮ハルヒの世界』だ。」

やっぱり俺が異世界人のポジションなのかな？
ってこの世界についたと思ったならなぜターデイスの中に長門とキョ
ンが？

あ、そうかこの座標……………」

「情報結合の解除を申請す……………」

かの有名なヒューマノイドインターフェイス長門有希と朝倉の戦い
の真っ最中の封鎖中空間に入っちゃったみたいだな……………」

どうしよう？

キョンスide

俺は朝倉に放課後呼び出され殺されかけた……………マジで死ぬ5秒
前だと思っていたとき長門が助けに来た。

長門と朝倉の宇宙的戦闘を真近で見そして長門が鉄の棒に刺された
と思った瞬間……………」

独特のエンジン音が鳴り響き鉄の棒の前に昔何かで見たことがある

特徴的なポリスボックスが俺と長門を巻き込み現れた。

今度はなんなんだよ・・・もう勘弁してくれ、やれやれ

s i d e o u t

ターデイスの中そして初めての世界（後書き）

二話目です少し強引ですが勘弁してくださいね
感想お待ちしております！

初の戦闘

おいおい世界についたと思ったらずくに戦闘開始ってか？

まあ、いいまずこいつらに話を

「おい、誰もいないのか？」

キヨンが言う。

おいおい俺がいるじゃねえかってそうか「知られざる英雄」《ミス
ターアンノウン》のせいで存在感がない、いやありすぎて無意識的
に目をそらしているのか？おっと、長門は気が付いたようだな！そ
の証拠に長門はその透き通るような目をこちらに固定しているしな

「うお！なんだお前？」

声を張り上げるな……

「そっちこそなんだ俺の船に勝手に入りやがって」

こっちはなにも知らないふりをしておかないと、そうしないと怪
しまれてしまうからな……

「すまんが何が起こったか俺には分からん！宇宙で「あなたは少し
黙っていて」

長門がキヨンの話すのを遮る。

「ここは何？あの空間は朝倉涼子が封鎖していたはず何も入れない。
どうやって入ったの？」

「質問をする前に君たちは何なんだ？まず、名前を覚えてもらいた

い」

「長門有希」「××× ××だ。」

「え？なんだって？そちらの男の方が聞き取れなかった。もう一度頼む」

なぜ聞き取れないんだ？キヨンの方だけだ
日本語をしゃべっているのか？50億の言語を自動翻訳するターデイスですら翻訳は無理だというのか！

「××× ××だ。」

もう無理……人間諦めが肝心だな！

「あだ名を教えてくれ」

「な、なんで？」

「彼ではあなたの名前を聞き取ることは不可能、強力な情報防壁がある。私でも解くのに1億年以上かかる。」

長門が驚愕の事実を言う。もしかしたらキヨンの名前がこの世界の根底にかかわっているハルヒに何らかの影響を及ぼすのかもな

「はあ、自分の名前も言えないとは……キヨンだ。みんなからはそう呼ばれている。」
だるそうにキヨンが言う。

「俺の名はドクター」

「ドクター何？」

あつ、あつぱりそうなるか

「只のドクター誰でも無くなってもないドクターだ。」

「いや、ドクターとやらお前はいつたいなんなんだ？」

「俺はこの世界ん定義で言うなら異世界人で超能力者だ。」
アブノーマル
 厳密には異常だけどこの世界じゃ変わりもないだろ。

「で？何をしにこの世界に？>ガ、ガッタン<！？」

「外にいる朝倉涼子の攻撃、ここも危ない」

「ここが只の閉鎖されているだけの空間だったらな。ここはターデイス僕のターデイスだ。世界、そして時空間を旅するんだ。情報操作ごときではやられないよ」

「なあ、長門どうする?」

「一旦体制を立て直してからもう一度戦う」

長門たちが何か喋っている間に俺はフォースフィールドの設定を完了させ作動させる。

「やっぱり、おまえらは卑屈だね？まずこつというのは、話し合ってみるんだよ！」

といい俺は勢いよくターデイスのドアを開ける。

「おい、ま、ま」

最後まで言い終わるまでにはもうドアを開けていた。

「あら、あなたがこのヘンテコな青い箱をこの空間に運んだ張本人ね？別にどうでもいいわ、あなたごと消してあげるわ。」
と朝倉は鉄の棒を某英雄王の王の財宝ゲートオブヒーロンのように打ち出すが

キーン！カキン！バキ！

といったように俺の前の透明な壁に遮られ俺には1つも傷をつけない。

「それだけか？無駄だね。ポイントゼロ、フォースフィールドがすべて跳ね返す。で？どうする？」

「それなら、接近戦を挑むだけよ。」

そう言い朝倉はナイフを持ち高速で迫るが

「接近戦で俺に挑むとは笑い話にもならないな。俺は軍隊と一人で戦えるんだぞ？」

そついい朝倉の腕をつかみ投げ捨てる。

「おい、長門とやらもう時間は稼いだだろ？」

「情報連結解除開始……」

そう、長門が言い始めるとターデイスを除いてすべての机や椅子そして朝倉の体が消えていく……

「あゝあ残念所詮私はバックアップだったかあ」

「硬直状態を何とかするいいチャンスだと思っただのにな」

「変な乱入がなかったら達成できたのかな？でももう言っても後の

祭りね。これをあなたたち人間は後悔って言うのかな。」

「私の負け 良かったね延命できてでも気を付けてね、統合思念体は。」

と原作と同じ言葉を朝倉は紡ぐ

「最後にあなたは誰？」

「ドクターだ。ただのドクター。」
正直名前はないしな

「じゃあね、涼宮さんとお幸せに……………」
朝倉は完全に消滅した。

「教室を再構成する。」
言ったそばから教室が再構成される。

「で、どうする？まずは何処かへ行こうか。さあ、入れ」
そうして、二人はターデイスに入り

「君の家に行こうか？座標を」
そして長門が映画の時のように腕へ座標を渡す。

へえ、てか何でわかるんだろう。ご都合主義ってやつだろう。
ボタンを押し教室からターデイスが消えていくとき

「WAWAWA忘れ物」
ゲ！谷口だ、忘れてた……………」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていくのを

「うお、ナンナンドー」

谷口が目撃した……

まあ、谷口だしいや

あの三年前に行ったときの部屋にターデイスが現れ『ガガガガッガ
ガガ』あ……天井が……やべええええええええ

初の戦闘（後書き）

ご覧ありがとうございます。

フォースフィールドってスタートレックとかのと同じですよ？
次回詳しい自己紹介を

自己紹介！

さあ、長門の家についたわけだがどうしようかな……あの音は確実に屋根潰したしな、長門に後でどうするか聞こう。

ガチャ

「ここは？」

キヨンが呆けたように聞く

「ここは長門の家だ。」

ここがああ長門の家か……感激だな。

「そう。ここは私の家」

「まず、あなたは何？こんな技術この時代にはない。世界を移動するなんて情報統合思念体にもできない。そしてI.T.T.Fを圧倒する戦闘技術あなたは人間？」

長門がマシンガンのように質問してくる。

「まあまあまず座ってもいいかい？」

「どうぞ」

とあの何もない部屋に座る。

「で、ドクターとやらなぜここにきた？」

「ここに来る気はなかった。違う世界に行こうとしていた。その世界は魔法や妖怪などがいるような世界だ、だがターデイスを作動さ

せた途端トランスマツトビームいやそんなレベルじゃない、謎の何かに包まれた。気づいた時にはこの世界だ。長門よなぜだ？なぜ俺はこの世界に来させられた？」
大体検討はついているんだけどな。

「おそらく涼宮ハルヒがここにあなたを此処に呼んだ。あなたが現れる少し前涼宮ハルヒから膨大な情報フレアが観測された。それがあなたとこの移動装置を此处へと呼び寄せた。それがあなたがここにいる理由。」

「だからターデイスがこの時間軸に固定されているのか、つまり俺はここから動けないと・・・」

「そう」

「どうしようかな？でも、少しターデイスを調整すればいいだろ。無理でもあの白い空間はすべての世界の上位世界だから移動は関係ないしな。」

「じゃあ、詳しい俺の説明をしようか。」

「あなたは何？」

「俺はさっき説明した通り異世界人で超能力者だ。」

「じゃあ、あんたはどんな超能力が使えるんだ？」

「キョンが聞いてくる。そういやここまでキョンは空気だったな・・・」

「具体的に言えば俺のは超能力というよりは少し違う。これはある世界での「異常」《アブノーマル》と呼ばれる力だ。それに俺の「

テレポート」やら「サイキック」なんて言うわかり易いものじゃない。「知られざる英雄」《ミスターアンノウン》と呼ばれ誰も俺を目視することができず覚えても置くこともできない。」

「それは存在を認識できないという異常アブノーマルということなのか？」

「結果はそうだが過程が違う。これは俺の強大さに目を逸らした結果だ。あ、勘違いするなよ俺様とか言ったりするような強大さじゃない単純な強さの副作用みたいなもんだからなだからこそ長門のように人間と違う存在には効かないし俺よりも存在が強大な存在には効果がない。まあ、そんな存在は神様が悪魔とかまず人間じゃないなぜなら俺は一人で軍隊と戦えるからな。」

「な・・・・・・・・・・」

キョンが絶句する。普通一人で軍隊と戦えるなんてアニメや漫画の中にしかないからな

「じゃ、今日のお話はここまでさあキョンは家に帰った！帰った！と無理やり家に追い返す。」

「長門も帰った方がいいと思うよな？」

「思う。」

「てなわけで、さようなら」

ガチャと音が鳴り長門の家から追い出す。

「さて、話すことがある。キョンは気づいていなかったようだがな。や、屋根がぶつ壊れてる。何でもする許してくれ・・・・・・・・」
と言いつつ土下座する。

「別にいい。後で直しておく。」
おお、長門が寛大でよかった。

「あと一つ少しここ借りてもいかな？住む場所がないんだ。町にこんな古びたボリスボックスが在ったらへたすりゃ撤去されちまう。」

「いい、この部屋をつかって」

と言い、部屋を貸してくれる。長門感謝だな。よし、ここでやりたかったことがあるんだよな。明日までに準備しないとな……キヨンの驚く姿が目に見えかぶぜ！

キヨンSIDE

今日はいろんなことがありすぎだ。朝倉が殺しにかかってきたり、えーと誰だっけあの男は？だれか忘れたが謎の男が青い箱に乗って現れ朝倉と戦い長門が朝倉を消した。文字道理消したんだ。もう今日は疲れた、寝よう……

『翌日』

今日も始まりあの長門《宇宙人》がいるであろう学校へ向かい……

「ねえキヨン！新しい先生が来るらしいわ、入学してからすぐよおかしいとは思わない？」

そう、我らがSOS団団長涼宮ハルヒだ。昨日ここで自分が望み探している宇宙人の戦いがあったとも知らずに新しく来たという先生に夢中だ。なぜこう近くのことには気付かないんだろうな？

「その先生は物理の先生らしいわ！ねえ、聞いているの？キヨン！キヨン！」

と肩をガンガン脳震盪でも起こしそうなくらいな強さで揺すつてくるので

「聞いているよ。そんなに騒ぐことでもないだろ？都合が変わっただけだろ？それに今日はちょうど一時間目が物理だからな。それで判断してみろよ。」

「あんたに言われなくても、そうするわ！どんな奴か気になるわね！」

別に俺は気にならないよ……

キンコンカーンコン

ほら、岡部のホームルームが終わったぞ。何か岡部の話だと先生は男で24歳アメリカで大学を飛び級してるらしいな。何でこんな学校に来たんだ？どこかの大学やら研究室からの誘いぐらいあっただろうに。

すぐにその疑問は解決されることになる。

「あれ？先生遅いわね。もうチャイムなっってから3分ぐらいたってるわよ？」

ハルヒが尋ねると

「もう来てるぞ」

と教卓から音がすると

「うお！」と谷口が声を上げる。そして生徒がそこに目を向けると

「さあ、物理の時間だ！」

お、お前は昨日の！何で！ここに！？

SIDE OUT

自己紹介！（後書き）

主人公を話に絡ませようとするとこうなりました。

でもドクターが使ってたジョン・スミスは使えないしな
名前どうしよう・・・

感想受け付けてます！

俺の職業

「みなさん今日も元気かな？俺の名前は日之影空洞だ。」

と言いながらカクカクと音を立てながらチョークで黒板に名前を書いていく。偽名は迷ったがジョンスミスはやるとやばいのでやめ、そうなるこれぐらいだろう。日本人顔なのにヘラクレスはないしな。英雄の名前は使いたくない。めだかの世界では考え物だな。

「学校で教えるのは初めてだからおかしな点があるかもしれないがここところは頼む。」

「じゃあ、授業を始めよう。まず、俺が物理を専攻した理由だが昔俺は宇宙人やタイムマシンやらにあこがれてたからだが今でも信じてはいる。まあいいこんな昔話しても仕方がないので授業を始めようか。じゃあ、教科書１・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンコンカコンコン

てなわけで一時間目は終了だな。

「最後に何処かの部活の顧問をしたいと思ってるから何かおすめがあれば廊下にいるときでも捕まえてくれ。じゃあ、今日の授業はここで終了！」

そして、終わると同時にハルヒが全速力で走ってくる。

「先生！私のクラブの顧問をしてください！」

SOS団に顧問要るのか？鶴屋さんは名誉顧問じゃないのか？

「いいがどんなクラブなんだ？」

「宇宙人や未来人などを探し出して一緒に遊ぶクラブです！」
初めの言葉で大丈夫だと感じたな。

「面白そうじゃないか。放課後どこに行けばいい？」

「文芸部の部室へ。」

「わかった。放課後になり次第そちらへむかわせてもらおう。」
後ろでキヨンがものすごい呆れてるがどうしようかな？ま、キヨンはいいや。

「では、放課後に」

「あ、今度から素で話せよ。」
と耳元で言う。

「！？」

一瞬びつくりしたようにしジト目でこちらを見てくるが無視する。

ハルヒSIDE

やっぱり見込んだ通りだったわ。来ているのに誰も気づかないなんてありえないわ。いくら空気が薄いからと言ってこれはありえない、何かの力に違いはないわ。それに一発で私が猫かぶってるって気づいたしあなたの正体を暴いて見せるわ！

「おい、聞いているのか？」

キヨンが聞いてくるが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！」

「うるさいわね！いまあの先生をどうやってSOS団専属の監督にしようか考えてるの、邪魔したら罰金よ。」

「へいへい」

待つてなさい日之影空洞！

SIDE OUT

キングクリムゾン！

過程が消し飛び結果だけが残る！

そして放課後だ。今あの文芸部室の前にいる何か感動のようなものを覚えるな。そうして「失礼しま〜」・・・・・・・・・・「あ、きゃあああああああああああああ！」バチイン

「すみません。日之影先生」

「いやでも着替えのぞかれたら誰でもこうなりますってこちらこそすみません。」

「涼宮さんと呼ばれてきたんですか？じゃあ、お茶入れますね。」

着替えを覗いてしまった。なぜか「知られざる英雄」《ミスターア
ンノウン》も効かなかった。ギャグ補正か乙女の補正かどちらにせ
よ怖いね。でも、有名な文芸部室で朝比奈さんのお茶が飲めるなん
て感激だな。

「はい、おまたせしました。」

フッフ「俺の猫舌なんで。」

「そーなのか」

とたわいもない話を朝比奈さんとしていると

ガチャ

「朝比奈さんだけってあなたもいるのか。日之影先生いやドクター
と呼んだ方がいいか？」

キヨンが言う

「ここでは一応日之影と言っておいてくれ。ハルヒにばれるの面倒
だ。」

「わかった。」

「？」

朝比奈さんだけが訳が分からなさうにしているがそんな仕草も可愛
いですね。さつきもそのたわわと実「バシイ」

「あれ朝比奈さん何を？」

「すみません。失礼なこと考えられたような気がしたので勘違いで

したらすみません。日之影先生」

怖い朝比奈さんこんな朝比奈さんはゴトウー（ry

「長門は？」

「今日は休みらしいぞ。昨日あんなに戦ってたしな。疲れてるんじゃない？」

今日の長門

「これどうしよう」

屋根と戦っていた。

閑話休題

「で？あなたは此処の顧問をやるつもりで？」
あきれた様子で聞いてくるが

「ああ、もちろん」

「はあ、やれやれ」

ガチャ

「遅れてすみません。」
と言いつつ古泉がやってくる。

「こんにちわ。古泉くん」

「はい？ああ、あなたは今日赴任してきた日之影先生ですね。こちらこそよろしく願います。ですがなぜここに？」
「言いつつもこちらが何者が探っているようだな。」

「涼宮に此処の顧問をやってほしいと言われてな。」

ガチャ

「ごつめくん！遅れたわ。日之影先生これでいいわね？」

「ああ、これからもそうしてくれ、それにここじゃあ空洞でいい。」

「じゃあ、空洞、何かこの部活に質問はある？」

「何をするかは聞いたから部員は？」

「私含めて5人よ。今いるのは朝比奈さんに古泉君そしてキョンね」

「いいだろう。顧問をやればいいのか？」

「ええ、お願いするわ！」

「すまないが今日は仕事が残っているんでな。また明日から参加させてもらうよ。」

「明日は休みだから、不思議探検をするわよ。9時に駅の北口集合、遅れたら罰金ね。」

「わかった。じゃあ、また明日。」

そして、土曜日の今日

「キヨン遅いな。」

「遅いわね。あ、来たわね。キヨ〜ン罰金！」

そして、あの喫茶店でくじを引く、俺は……古泉とか……
・くそう何でハルヒや朝比奈さんじゃないんだ！

「では、よろしくお願いしますね。」

キヨンは長門とハルヒは朝比奈さんと3組に分かれて探索へ

「12時にも一度ここに集合ね！何か見つけてくるのよ。」

さあ、古泉は何を話してくるのかな？

「どこへ行きましょうか？」

「そうだな、この町を知らないので適当に頼む。」

「では、少し時間を潰しましょうか。少し離れたところの喫茶店で話しましょう。」

「ああ、わかった。」

喫茶店

「単刀直入にお伺いします。あなたは何者ですか？」

お、これは大胆に聞いてきたな。もっと回りくどく聞くもんだと思
ったよ。

「何者と言われても俺は日之影空洞としか言いようがないな。」

「失礼かと思いましたが少し調べさせてもらいました。ですがあな
たのことは何一つ出てこない。そして尾行してもいつの間にかいな
くなる。僕が聞いているのはあなたが例えば超能力者だとかそいう
ことです。」

やっぱり調べてたか。昨日から少しおかしいなとは思っていたから
な。まあ、尾行の時は異常全開で消えたけどな。

「そうか、じゃあ、観念しよう俺は異世界人だ。あと超能力かと言
われれば少し違うが能力も持つてる。」

「では、あなたはなぜ涼宮さんに接触を？」

「いま、俺はこの世界には来るつもりはなかったんだ。世界を旅し
ている途中この世界に引きずり込まれた。だから長門の家に居候し
ている状態でな、移動装置の設定が完了したらさっさとおさらばさ。
涼宮に近づいた理由は面白そうだったからな。あ、俺は涼宮をどう
にかしようなんて考えてないからな。」

「信じるかはあなたの行動で判断させてもらいますよ。では、探索
を続けるとしましょうか。」

といい伝票を持ち古泉は立ち上がる。

「ここは奢りますよ。情報料ですよ。」

といい、後はこの町を案内してもらった。何の変哲もない普通の街なのになぜこんな人外魔境になっているんだろうか？ドクターの力ーディフのように時空の裂け目の跡地なのか？

さあ、12時になったのでもう一度のくじ引きだ。よし、今度こそ！

なんで？おのれ！涼宮ーお前は何なんだーてな感じでハルヒとなりました。朝比奈さんは？どこ逝ったの？長門は？

「なにそんな不機嫌そうな顔してるのよ。私とがそんなにいや？」
別にそういうわけじゃないんだが見た良し頭良し運度神経良しと三拍子揃っている美人と歩いているのになぜだ？

「いや、そういうわけじゃないんだが？」

「なんで疑問形なのよ。」

「いや、なぜこんなにきれいな女の子と歩いているのに何も感じないんだろうと思って」

「デートじゃないからじゃない？それに恋愛感情なんて一種の気の迷いよ。気にするものじゃないわ。それでも仮に科学に身を置く者なの？」

「ああ、その通りだな。」

としやべりながら町を探索したそして集合時間間際にこんなことを

聞いてきた。

「あなたは宇宙人や未来人、超能力者そして異世界人が本当にいると思う？」

「授業の時に言っただ。俺はそれを探するために物理学者になったんだ。自分で自分の夢を否定してどうする。ここにこの日之影空洞が宣言してやろう。宇宙人、未来人、超能力者、異世界人はこの世界にいる！」

「ばっかみたい、空洞が宣言して何になるのよ。」
と言いつつも笑っていた。そうだよ、いるんだそれも君のすぐそばにね

そうして今回の不思議探索は終了を迎えた。さて、この世界にはいつまでいようかな？

俺の職業（後書き）

名前は悩みましたが能力から考えさせてもらいました。
少し長くなってしまいました。
それでは感想をお願いします！

次の旅へと

あの不思議探索から数日経過しキヨンの方はあの探索で朝比奈さんからアプローチを受け、古泉からは昨日アプローチを受けていた。モテモテだな。

そして俺は部室で古泉とゲームしたり朝比奈さんと雑談したり長門に本を貸してもらったりしながら過ごした。

そして今日おかしなことが起こった。それは、少し前に遡る。

4時間前長門家にて

「長門よ、お前たち情報統合思念体は自立進化の可能性を探るために涼宮ハルヒを探索してるんだよな。」

「そう。情報統合思念体は自立進化の可能性を探している。だから涼宮ハルヒを観察している。」

「そこだよ。なぜ涼宮にこだわる？他にも自立進化の可能性はある。」

「！？それはなに？」

「こいつだよ。」といいターデイスを指をさす。

「これはただの次元超越時空移動装置特に特異するべき点はない。」
「わかってないな。」

「これはただのターデイスじゃないんだよ。世界を渡れるんだいわば世界を凝縮したようなもの。これ一つが一つの世界だといっても過言ではない。こいつの調整をするから手伝ってくれ。その時にこれをスキャンしてみるがいいそうすればこいつのすごさがわかるだろう。」

といい長門とターデイスの中に入る。

「××××××××××××」

と長門が呪文？を言う。

「!？」

長門が固まる。

「これは涼宮ハルヒを超える何かがある。本質的には涼宮ハルヒと似て非なるもの。自立進化の可能性になりえるがこれは情報統合思念体では理解不能役に立たない。」

高度すぎ？

「そうだったか。少しでいい調整を手伝ってくれ。」

「・・・・・・・・・・」

無言で有名カレー店のチラシを見せてくる。

「ここに今度つれて行ってか？」

無言で首を縦に振る。

「ゲ！これ一皿3000円もするじゃねえか・・・・・・・・・・」

無言で長門が見つめてくる。

「わかったよ。連れて行ってやるから手伝ってくれ。」

「わかった。」

と長門に言いくるめられカレーを奢ることが確定しながらもターデイスの調整をしているとき……

ガタン

とターデイスが揺れ機器から火花が散る。

「どうしたんだ？」

長門に聞いてみる。

「涼宮ハルヒが新たな世界を創造しようと新しい時空間に自分と彼を閉じ込めた。」

ああ、あれは今日だったのか。

「これでそこには行けないか？」

ターデイスなら……

「今の調整では不可能、できるとしても……………」

キョンスIDE

妙なことになっちまったな。閉鎖空間にハルヒとともに閉じ込められちゃったな。古泉はどこにいる？

あ、あの赤い球体は

「古泉か？」

「はい、そうです。」

「もっとまともな姿で登場すると思っていたが？」

「それも込みでお話することがあります。正直言います。これは異常事態です。「そうだな。」

！？声のする方に目を向けるとドクターが

「なんでお前がここに？」

といい触ろうとするがスウウと手がすり抜ける。

「あ、あれ？」

「そうだ、古泉ですら無理なのにどうやって入れると思っているんだ？これはホログラムだ。俺の船から映し出してる。」

「そういえば朝比奈みくるから伝言を言付かっています。ごめんなさい、私のせいです。」と「長門からはパソコンをつけるだよ。」

「俺からは一つだけ眠れる姫を起こすのは王子様の仕事だぜ。」
古泉とドクターの体が消えていく……

「お、おい、まて」

「パソコンをつけるよ。わかったか？じゃあ、世界はお前にかかっている。勇者みたいでいいだろ？」
といいドクターが消える。

「では、私もこれまでのようですね。そちらの世界で私が生まれるようなことがあればよろしくやってください。それでは」

おい、古泉まで……よし、パソコンをつけよう。

SIDE OUT

とここからは原作通りだ。特に言うべきことはないだろう。
あの空間のエネルギーを吸収したお蔭でこの世界から離れられるようになった。

「キョン、やったな！」といい肩を叩きまくる。

「軍隊と戦えるような腕で肩をたたくな。へたすりゃ吹き飛ばさう。勘弁してくれ。」

「つれないな。さあ、差し詰めお前は世界を救った勇者ってところだ。さ、ここからはどうするハネムーンか？」

「ふざけんな。」

「まあまあ、これで俺はお役御免だな。ここで俺は消える。そして知られざる英雄で忘れられる。いままでは異常を最小までに抑えていたが最大にまで上げる。あ、お前たちの記憶は消えないぞ、長門に頼んで消さないように頼んだからな。残念だったな。三日後俺は発つだから電話番号を覚えておく。」

「何でこんな急に？それに世界が違ふのなら電話は通じないんじゃない？」

「元々違ふ世界に行くつもりだったんだ。その世界に行かせてもらうよ。俺の電話は特別性だぞ。宇宙の端から端でも届く。世界も同じだ。」

「じゃあ、何時に行くんだ？」

「三日後の夜7時だ。」

「長門の家に7時だな？」

「ああ」

そして、三日後

「なんでハルヒ以外全員集合しているんだ？」

「僕は世界を移動する装置を見たかったもので」

古泉が正直に

「私は普通にお見送りに」

朝比奈さんは可愛らしく答える。

「一応SOS団の顧問だからな。見送りぐらいする。」
キヨンが答える。

「じゃあ、俺の船を見せよう。」
といいあの部屋の襖をあける。

そこにはターデイスがある。反応は三者三様

「これが？これは1960年代のイギリスでのポリスボックスじゃないですか。」

古泉が

「こ、これはまさかこれがここに？じゃあ、あなたは……」
なぜあなたは驚愕しているんですか？朝比奈さん？私は未来で何かしたんですか？俺……」

「やつぱりこれか。見た目は変わらないのか。」
キョンが言うがこの見た目がいいんじゃないか。なぜわからない。

「古泉よ。なら中を見えるか？」
そついいドアを開ける。

ガチャ

「これは………すごい！」

なんかすごい古泉のキャラが変わっているな。これが素か？

「はう」バタア

朝比奈さんが倒れた。

キョンは外で待っている。

「なぜ見た目より中が広いの？」

「企業秘密だ。」

「では、行くとしよう。長門よ、調整は完璧だな？」

「完璧」

「では、出てくれ。」

「待つて、これを」

といい長門が一冊の本を渡す。「ハイペリオンの没落」よりによつてこれか……

「読んで」

といい見つめてくるので

「ああ、わかったよ。」

「では、出てくれるか？」

ガチャ

ドアを閉める。

「じゃあ、何かあればまた来る。また逢う日まで。」

「では、また」

「またね。」

「またな」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていく……………

「行つたか？」

「この世界から彼の反応が消滅した。」

「またと言つたんです。また会えるでしょう。」

ターデイス内部

「ハルビの世界はまた来ないとな最低でも消失の時にはな」

では、あの空間に行くのでしょうか、

白い空間へ

「もう私にこんな子を押しつけてあいつは何を考えているのかしら？」

アテネはつぶやく。

「言ったところで無駄でしょ？待ちましょ、気長にね」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが現れる。

「やっと来たわね。」

ガチャ

「あ、アテネあの送った子はしっかりという？」

「ええ、ここにね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」

次回へ続く！

次の旅へと（後書き）

強引ですが終わらせました。正直この世界は消失やエンドレスエイトがありますのでまた後でも来る理由は山ほどありますね。ドクターにはやっぱリコンパニオンが必要でしょう。ということではルヒ本編では初めと消失そして驚愕にしか出ていませんので朝倉さんにご登場願いました。

では感想よろしくおねがいします。

コンパニオン

なんで俺戦ってるの？

「ハアアアア！拳破拳破、拳々破アッ」

「ふん、効かないわね。今度はこっちの番よ。」
ほんとになんでこうなっただらうね。

一日前

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」
なんでナイフ向けられてるの？

「てか、何で向けられてるの？」

「そのぐらい自分で考えなさい。晩御飯までには帰ってきなさいよ」
「」

おい、まてアテネなぜとめない。それに晩御飯ってなんだ。

シュン、ビュン

「おい、まて話せばわかる。」

「問答無用」

なぜ知ってる？ ナイフ避けながらネタやるのは神経使うな。

「私あそこで消えたんでしょ？何でこんなところに送ったのよ」

「いや、一緒に旅をしてもらおうかなつと」

「何であんたと一緒に旅をしないといけないのよ」

「戻ったところでもう統合思念体とのリンクは切れてる。今の君は妙な力が使える人間じゃない美少女女子高生つてな感じた。魔法少女もビックリだな。」それはもうね。情報連結解除なんてどんなチートだよ。

「じゃあ、どうしろつてのよ……」

「だから俺と来い。その中で答えが見つかるかもしれないだろ。それに元の世界にずっとは無理だが少し見に行くぐらいなら定期的にさせてやる。」

「いい、行かせてもらうわ。でも一つだけ条件があるわ。」

「そんな簡単に決めてしまっているのか？」

「だからこそその条件よ」

「何だ？」

「何なんだろう。俺に死んでくれとかはきついな。まあ、死んでも死なないけど」

「私と戦いなさい、あなたが勝つたらついてく、あなたが負けたらその時は……あなたの命をもらうわ。」

おおう、過激だな。

「いいだろう。アテネ合図頼む」

「OK、ガンダムファイトーレディーGO」

「ガンダムじゃねええええええええええええええええええ」

声を反響させながら戦いは始まった……

てなわけで初めの場面からさらに24時間後

「もうだめ……」

「私毛・・・」

「はい晩御飯の時間ですよ。涼子ちゃんの手伝ってね。」

いいアテネはどこからかちやぶ台を持ってくる。どっから持ってきたんだそれ……

「だから涼子ちゃんって呼ばないでっ」

と言いながらも晩御飯の準備を始める朝倉、なんだ？母と子か？

「母さん今日のご飯は？」

聞いてみた。

「誰が母さんか！」

アテネに殴られた。

そんなこんなでご飯を食べた。朝倉のおでん映画で美味しそうだったけどほんとに絶品だな。

「じゃあ、行くわ」

そろそろ行こう

「勝ち負け決まってるないけどいいわ、じゃあねアテネ」

「また、3人でご飯食べましょ」

「ああ」「ええ」

「「またね」」

「ええ、また」

ポリスボックスに入る

「何此処！」

といい外に飛出しポリスボックスの周りをぐるぐるとまわる。

「中の大きさと見た目が比例しないわ！なにこれ！こんなのに負けたとなれば納得できるもんだわ。」

「あ、ああ、勝手に納得しておいてくれ」

次の世界はどうしようかな。あ！朝倉に聞いてみよう。

「おい、朝倉「朝倉つてのをやめてくれない？他人行儀でいやだわ。これから長く共に旅をするんでしょ。」

「わかったよ。涼子ちゃん」

「涼子ちゃん言うな！涼子よ！わかったわね。涼子よ」
ナイフ向けながら言うのやめてもらえませんか？

「わ、わかったよ。涼子ね、涼子OK、OK」

「分ればいいのよ。分ればね／＼／」

顔を赤くするほど嫌だったのか……残念だな。涼子ち「何か？」だからナイフ向けないで……

「涼子、どこの世界に行きたい？」

「どんな世界があるのよ？」

「どんな世界でもある。剣と魔法の世界、未来都市、科学と魔術の世界、夢の世界、冥界や天国、魔王までいる世界だってある。より取り見取りだ。」

「じゃあ、妖怪が見てみたいわ。本で読んで見てみたかったのよ」あゝ、涼子が目を輝かせながら言うてくる。

「じゃあ、出発だ！」

そう言いターデイスを作動させる。

「2000年代に行こう。」

ギョォーン！ギョォーン！独特のエンジン音を鳴らし動き……ああ、着いたか。

まず、外の様子を見よう。このパソコンで見れるだろう。ガチャ、ガチャ　なんか外で軍隊みたいなのがターデイス囲んでるんだが、これってヤバいところに出たか……あれ？一人だけ軍隊じゃないな。あの特徴的な服は……

「さあ、外に出てみよう。」

「大丈夫なの？武器持って構えてるわよ。」

「こっちは武器なしだ。やられてもこっちに正義がある。」

「不法侵入だけどね。」

「これは痛いところを……。」

「では、参りましょうか？お姫様」

「行きましょう。」

俺が涼子の手を取りターデイスのドアを開ける。

ガチャ

「おい、貴様何者だ？」

軍服の一人が聞いてくる。

「俺h「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

やっぱりえりんか……

T
O
B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
↓

コンパニオン（後書き）

やっぱり東方の世界に行ったとなれば歴史のーから見ていくべきで
しょうしね。では感想よろしくお願いします。

天才

「俺は「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

「やっぱりえりんか……」

「俺はドクターだ。一つだけ質問させてくれ。今年の年を教えてくれ。」

「今は××年××日ですけどそれがどうかしましたか？」

「すまん、涼子間違えたようだ。」

「何を？」

「首をかしげるが」

「時代だよ。時代、今は西暦2000年代じゃない。それより8000年以上前、紀元前6000年と少し前だ。ミस्ता……」

「ミस्ताじゃないわよ。」

と涼子はジト目で見ってくる。ジト目いいよね。好きなんだよ。

「ずっとその顔で頼む。」

「変態」

「ひびい……」

「お話し中よろしいかしら？あなたここにどうやって来たのかしら？」

「この箱に乗ってだけど？」

「こんな物でできるはずがないでしょう。え〜と、ポリスボックスですってね。」

「すまん涼子、中で待っていてくれ少しかかりそうだ。」

「ええ、わかったわ。」

「あなたたち下がってなさい。」

「しかし、「大丈夫です。スキャナーに武器の反応は無かったですよ。」

「わかりました。」

しぶしぶといった感じで軍服の男たちは部屋を出ていく

「では、話の続きをしましょうか。こんなものでここまで来れるわけがない。此処は地下25階、それにこの町の外周200キロに亘って能力によるシールドが貼られていて外からは入れないわよ。ドクター？」

「俺が来た方法はそんな単純にシールドを突き破ったとかそういう物理的に来たというのとはすこし違うな。簡単に言うなら空間転移かな？」

「そんな・・・いや信じましょうそれ以外にここに来る方法がない。でも、どうしてこんなところに？」

「ここに来るつもりはなかった時代を間違えたんだ。もともと今から数えて8000年後に行くつもりだったからな。」

「まただよ（呆）前は世界を今回は時代だ。もう、間違えるのは必然なのか？」

「時代？あなたの話から推測するとこの青い箱は、時間と空間を移動できるように聞こえるけど。本当なの？」

「ああ、俺はあなたからすればタイムトラベラーだ。」

「こんなバカな話があつてたまりますか。いくら私でもタイムマシンなんてものを作るとすればものすごく大掛かりな装置になる。それに空間移動まで？中を見せてもらってもいい？」

「ああ、いいぞ。」

ガチャ

「な、何よこれ、外見と中が一致しないじゃない。ちょっと待って理解するから……」

「そっぴやえーりんって自他ともに認める天才だったな。だからこそ……」

「おい、やめておけここを理解すれば頭がおかしくなるか死ぬぞ」
「此処はあのターデイスを超えるんだタイムボルテックスならぬワールドボルテックスか？があるんだからな。」

「そうさせてもらっわ。理解しようとするだけで頭がおかしくなりそうよ。」

「あ、話は終わったの？」
涼子が訊いてくるが

「まだだ。おい、そうふて腐れるなよ。ここのことはこの時代の人間に聞くのが一番だぞ。」
そう言ったら少しは納得したようでパソコンを弄り始めた。

「で、あなたたちはどうするの？このまま8000年後まで行くの？」

「いや、少しだけこの時代に、いようと思う。で、一つ提案だ。少しだけ君の家に泊めてもらえないか？」

「いいけど、あなたはその対価に何を私にくれるのかしら？」
えりんが少し期待した目で見てくるので

「これを見せてやろう。」
と言っているコートの内ポケットからペンのようなものを取り出す。あ、言い忘れてたけど今の服装は俺は10代目ドクターの服装で涼子が黒リボンが真ん中にある私服である。あのターデイスの山のような服から選んだ。服で何が変わるのかと思っていたが全然違うな。涼子可愛いもん。あ、話がずれた。

「これは、ソニックスクリュードライバーだ。」
今まで使いたかったが使いようがなかったしな

「どんな使い道を？」
えりんが玩具を見つけた子供のように目を輝かせる。何で俺が会った女の子はみんなこんな目をするんだ。好きだけどねこんな目する人は。

「ドアを開けたり閉めたり、それに物を壊したり直したりいろんなことができる。これを応用すればいろんなものができる。」

「これはいつの時代の？」

「此処の歴史が俺の知ってる通りならばこれは今から1億年後以上後の物だが？何でそんなことを？」

「ここで私がこれをもらってしまえば歴史が変わるんじゃないかと思つて「いや、君ほどの天才ならすぐにこれぐらい作れるよそれが少し早まつたぐらいで変わる歴史なんて微々たるもんだよ。」

「じゃあ、ありがたく研究させてもらうわ。」

「ああ、終わつたら返してくれ。それはもう作ってないんだ。工場は今はバナナ園だ。」

「何でバナナ園？」

「なんでそんな不思議そうなんだ？」

「美味しいじゃないか、バナナ」

「何か釈然としないものがあるけどまあいいわ、これからよろしくね。ドクターそれに「涼子よ。」「涼子」

「なんでそんなにメンチ切つてんですか？いや、恋愛フラグはねえよ。勘違いされては困る。涼子からはあの奇襲の失敗した理由だしえーりんからは実験材料として見られてそうだしね。こええ……」

「こちらこそよろしく永琳」

てなわけで永琳の家に居候させてもらうことになった。あの後聞いた話だとこの都市は穢れと呼ばれる人間の寿命の原因からシールドで守ってるらしい、でも、科学力だけなら21世紀の地球とそう変わらないようだ。

「じゃあ、なんで俺は戦ってるの？」

何でこうなるの？まただよ。後ろにはぼろぼろの永琳、はあ、前の世界の奴の言葉を借りるなら

「やれやれ」

く！

次回に続

天才（後書き）

ソニックドライバーはここで出さないと使い道がなくなりそうだったので次初妖怪です。感想よろしくお願いします。

妖怪

てなわけで、ここに来た日から、一週間ぐらいたった。その間涼子は、俺と町を探索したり、図書館で妖怪の動画を見ていた。あの目の輝かせようはビックリだな。で、俺はえ〜りとソニックドライバーの改良したり霊力やら妖力やらの講義を受けたりしていた。知識としてはターデイスのお蔭で分かってても実物を見るのは違うね。やっぱりえ〜りんは本物の天才だった。ソニックドライバーだけでソニックブラスターやらソニックキャノンやら作ってたしそれに、素粒子ガンまで作ってた。軍隊と戦えるって受け売りやめようかな・

「お〜い、ドクター？どこにいるの？」

ターデイスの中で永琳が言うが異常に広いターデイスの中では聞こえない。

「お〜い」

あ、永琳だ。

「何だい？」

「ああ、そこにいたの、今日シールドの外に出て調査をするからついてきてくれない？」

「調査？」

「そうよ、穢れの度合いを調べるの、いまこの都市の住民は月へ移

住する計画を進めてるのそのためにどのくらい地上に穢れがたまっているのか調べたいのよ。」

やっぱ、月へ移住するんだ。それと同時にまた飛ぼう。

「わかったよ、涼子は……今日も図書館が、此処でも読めるのになんでわざわざこの町の図書館使っんだろ。いいや、今日も帰ってくるのは遅いだろうし、じゃあ行こうか」

涼子の奴長門みたいになってるな。親と一緒になら子も似るってか。

「ありがとう。一人で行くのは心細かったのよ。」

ということがあり

「さあ、出発だ！」

「テンション高過ぎない？」

「いいの！」

「じゃあ、これを使って二手に分れて測定しましょ」

と言いゴツイ機械を渡してくる。機械自体は21世紀の物とほとんど変わらないのね。

「じゃ、二時間後に町のゲートで集合ね。」

「妖怪とかいるんじゃないのか？大丈夫か永琳？」

「私はこう見えても強いだよ。」

といい力こぶを作る。全然強そうに見えない。

「何かあつたら行くから」

「大丈夫だって、心配性ね。」
と言い笑って歩き出す永琳。

「大丈夫かな？」
心配するんじゃない……すればフラグになるからね！

「へえ、こうなつてんだ。」
穢れは町の中を5として月が1以下シールド外が多いところで30以上低いところでも20ぐらいなんだな。

「これならすぐに測定終わりそうだな。」
早く帰って寝たい……俺の好きなことは1、旅をすること 2、寝ることだ！

ピピピピピ

「最後の測定終りわりつと」
じゃあ、帰ろう！

「で、何でおれの方が早いのか？ねえ、門番さん」
この門番さん、あの初めの時の軍服の一人で二度目にあつたときものすごく警戒してきたけど永琳のおかげで今はよくしゃべる。この町の常識とかは正直永琳とかよりわかりやすい。永琳は天才だから少しずれてるからね。

「今日は誰待ってた？涼子ちゃんかい？それとも永琳さんかい？あんな美人と付き合ってたんな裏ワザ使ったんだい？」

「おい みうs ミス おい 何勘違いしてるわけ？付き合ってる？世界がひっくり返ってもあり得ねえよ。で、待ってんのは永琳だ。」

「永琳さんならあんと出て行っただっきりだよ。考えてみれば少し遅いね。見に行ってきたらどうだい？」
ほら、言わんこっちゃない。

「ありがとう。じゃあ、行ってくる。」
と言い全速で駆け出す。

「なんで、こんなに面倒なことになるんだろうか。」

さあ、ターデイスまで戻ろう。

「此処なら探せるはずだからな」
パソコンを操作して永琳を探す。

くそ、範囲が広すぎる。どうやって探そうか……あ、永琳は俺のソニックドライバーを持ち歩いてたな。あれの信号を……見つけた。此処から南西へ34キロ

何でこんな遠くに？メインスクリーンに移そう。

「なん……だ」
いやいや、ネタに走っている場合じゃない。永琳は、今え〜と鬼かなと戦ってる。

あの鬼強いな、涼子といい勝負じゃないか、てことは、ここじゃ最強クラスってことか……。永琳じゃ少し辛いかもな、正直永琳は、いくら強いといっても後衛タイプだからな、あんな前衛バリバリのタイプには、さすがに押されてるな。

「よし、行くぞ。」

そう言っただけでタージスを作動させる。ポリスボックスが徐々に薄くなり消えていく……。

涼子SIDE

「最近あいつが私に構ってゲフンゲフン、私の答えを見つけるのを手伝うんじゃないの？」

と独り言をつぶやきながら図書館の個人用のパソコンのモニターを見ている。

ギューーン！ギューーン！

「あれ？あの音って……。ち、ちよつと」

と言い猛スピードで図書館から出て永琳の家へと戻る。
実にここまで20秒……。早すぎ！！

「どこ行くよ……。」

と消えていくポリスボックスを見つめながら呟いた。

SIDE OUT

永琳SIDE

「さあ、ここまで見たいだな、人間」

と鬼？の妖怪が迫ってくる。

やっぱりドクターの言った通り一緒に行けば良かったのかしら？いまさら言ったところでしょうがないわね。でも、まあ、いいわ。私が高死んでもこの都市は月へ行くわ。ドクターはこの未来を知っていたからああ、言ったのかしらね？

鬼が妖力で作ったエネルギー弾を腕から打ち出す。

でも、もう遅いわ。じゃあね、涼子、ドクター

ギューーン！ギューーン！

この音は？

SIDE OUT

着いたようだな場所はちょうど鬼と永琳の間

ガチャ

「これからは俺がお相手しよう。」

「おい、永琳ターデイスに入ってる。」

「で、でもあなたひと」「大丈夫だ。接近戦なら負けはしないさ。」

「わかったわ。でも、死なないでね。」

「俺も死にたくはないからな。ま、俺はまだ死なねえけどな文字道理。」
アブノーマル
そう言い異常を全開にする。

「消えた？ま、別れ話は済んだか？じゃ、始めようか。」
鬼に気づかれる前に後ろに立ち本物の日之影がやったように、はで
きないので首を持って地面にたたきつける。

「てめえ、は？」

此処はこつ名乗るべきだろ

「元、英雄」

次回へ続く！

妖怪（後書き）

次戦闘です。涼子をどこで一度離脱させるか迷います。
では、感想よろしくお願いします。

十二の試練へゴットハンド

「元、英雄」

そついい、鬼と拳を打ち合う。

「拳破拳破、拳々破アー」

初めから飛ばさないと少しまずい……正直こいつは会ってみてわかったが涼子よりも格上だ。

「痛つたいな。今度は、こつちからだ。」

という形でダメージはあるようだが致命傷には至らない。まずい、非常にまずい……

てな感じで一進一退といった感じで二時間以上も戦い続けている。

どうすればいい、やっぱり至近距離での連続で拳破をかますしかないようだな。

「殺り合つてるときに考え事か？」

ズゴオオオオン

「へへ、やべえなこれは。」

油断したぜ。拳破は後8発が限界だな。

「じゃあ、ここでお前を殺してあの箱の中にいる女を殺せば終わリだな。」

ターデイスの中は安全だろう。何せあのドアはチンギス・ハーンの騎馬軍団の攻撃でも敗れなかったんだから。

「さあ、来い最終ラウンドだ！」

そう言い、指を鳴らし「パチン」ターデイスのドアを閉める。

「もう立つのもやつとなのに何を言うかと思えば」
と勝利を確信している鬼が言う。ここで、一つ目はここで捨てることになりそうだな。

「なら、来いよ。さあ！トドメもさせないのか？」
こんな挑発は普通人間相手には聞かないんだがな。鬼だからこそこ
ういうのは聞くんてもんだ。鬼は嘘を嫌うからな。

「ああ、そこまでいうのなら……行くぞ」
と言い放った瞬間俺の右胸に鬼の腕が突き刺さる。

永琳SIDE

助けに来てくれたのはいいけど何やってるのかしら？あ、このモニターで見れるみたいね。ここをこうしてつと映ったわ。

戦ってるみたいね。すごい……彼、接近戦なら最強ね。霊力や気で強化している訳でもないのに妖怪とそれも最強レベルの妖怪と勝てないまでも渡り合ってる。ほんとに彼人間かしら？

二時間経過……

あの二人？いつになったら決着がつくのかしら？終わら『ズゴオオオオン』な、何？ドクターが吹き飛ばされてるじゃない。

煙が晴れる。そこには満身創痍ながらも立っているドクター

だ、大丈夫なの？「なら、来いよ。さあ！トドメもさせないのか？」
ちよつと何挑発してるのよ！

「ああ、そこまでいうのなら．．．行くぞ」と鬼が言う。

「ドクター！ドクター！」と叫びながらドアをドン、ドンとたたく
が開かない。

「何で開かないのよ！」

ザクツつと言う音がしたと思ったらドクターの右胸に鬼の腕が突き
刺さっている。

「いやあああああああああああああああああああああああ
ターデイスに永琳の悲鳴が響き渡った．．．．．」

SIDE OUT

「終わったか．．．．．」
と鬼が呟くが、

「楽しかったか？なら、終演だ。」

と俺は言い全力で拳破を鬼の頭に向けて撃つ。

「ああ、楽しかったぞ．．．．．」

と言ひ鬼は頭が吹き飛び動かなくなる。

倒したか？あ、アテネの奴再生後はタイムロードと一緒に体が安定しないように十二の試練ゴットハンドを改悪しやがったな。

ああ、もうヤバいな……。落ちるぞ。でも、その前に「パチン」ドアを開けないて……。

永琳SIDE

「そんな……。私のせいで……。 」
モニターを見つめながら虚ろな目で呟く。

「これはタイムマシンなんでしょ！戻れ！戻れ！戻れ！」

いつもの永琳ならば起動ぐらいはできるが今は完全な錯乱状態、不可能だ。

「なにこれ……。 」

ドクターの体から光が飛び出る。それは永琳では理解できない。この時代にはなく、もしかするとこの世界では生まれないかもしれないかもしれない、「幻想」《魔法》この世界の魔法とは似て非なるもの本物の奇跡タヌムとある世界では、それを『宝具』《ノウブル・ファンタズム》と呼ぶ。

そうしてドクターの体が再生される。

「え？……。なんで？」

キョトンとした顔で言うが理解できない。

ドクターが至近距離から攻撃し鬼の頭が吹き飛ぶ。

倒したみたいね。あ、あれ？なんでドクターは倒れそうに「ガチャ」
ドクターが指を鳴らすと同時にターデイスのドアが開く。

「開いたわ！ドクター！」

と言いつターデイスからボロボロの体のことを忘れドクターのところに駆け出した。

S I D E O U T

あ、永琳だ。後は頼もう。

「永琳、後は頼んだ。ターデイスを作動させてくれ。君ならできるだろう。」

と言いつ俺は意識を失う

「ええ、わかったわ」

と微笑みながら言ってくれる。

永琳は俺をターデイスの中まで運び、その頭で起動させる方法を探る。のちに月の頭脳と呼ばれる人間だからできることだった。

ギューオーン！ギューオーン！

「これでいいわね。」

と疲れ果てて眠る。

涼子 S I D E

消えてからも二時間以上、もう戻ってこないのかしらね？この世

界もいいところだけどずっといるには向かないわ、だから、戻ってきなさいよ。ドクター・・・・・・・・・・

ギューーン！ギューーン！

消えたはずのポリスボックスが戻ってくる。涼子は近づきドアを開けるとそこには・・・・・・ボロボロの永琳にドクターは死んだように眠っている。

「何してたのよ。」

次回に続く！

十二の試練へゴットハンド《（後書き）

十二の試練一回目の使用です。正直どこで死なせるかを考えないと使えないので使い道が少し難しいです。話は変わりますがそろそろドクターフーの3期が日本でやりますね。楽しみです。では、感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8398x/>

知られざる世界の旅人

2011年11月3日02時12分発行